

# CHOISIR



**Vol.47**

**CHOISIR**  
Vol. 47 **CONTENTS**  
September 1996

**me & CHOISIR** .....1

●「やおい論争」●

やおい論争を総括する。

栗原知代 .....10

これでおしまい。みんな、元気でね。

色川奈緒 .....16

# me&CHOISIR

高石洋子

『CHOISIR』との出会いは、創刊した当時からだから、ずいぶん長い付き合いになる。そのころ、漠然と女性を取り巻く問題について関心を持っていて、たまたま転職したばかりの職場にやはり新しく入ってきた色川さんと出会い、当時彼女は厚生労働省「改正」の問題に取り組んでいるとかで、きちんとした問題意識を持ち、『CHOISIR』というミニコミを創刊したと話してくれたのだった。私は、女性の問題と言っても何か専門的に取り組んでいるわけではなかったし、実際に行動しているわけでもなかったし、そういう友人もいなかったのだから、さっそく購読者となった。

さて、私は「運動のノリ」が苦手である。二十歳すぎまでカワイイ従順な女を自然にやってこられた私が、入社した会社のあまりに旧態依然とした男女差別にさすがに目覚めてしまい、なんとかこのモヤモヤを払拭したいと勇気を振り絞って、新聞で見つけた女性関係の集会に出かけてみたのだ。そこで、自分の主張をしっかりと述べ、ハキハキと発言する女性を見て、何も考えてこなかった自分がただただ恥ずかしくなった。しかし、その反面、会場の異様な雰囲気も気になっていた。集会場には、スッピンにモンペスタイル、もしくはジーパンにTシャツ、おしゃれな感じではないという出で立ちの女性であふれていた。当時OLをしていた私は、いつもどおり化粧をし、ブラウスにスカート、パンプスという服装で、街ではあふれているのに、ここでは一人浮きまくっているのである。しかも、女性の問題を一緒に考えようという友好的な雰囲気ではなく、どこかトゲトゲした感じなのだ。隣に座っていたモンベルックの女性が腕を組み、足を投げ出し、「あなた、そんな格好して問題がわかってるの？」というような目を私に向けていたことを、今でもはっきり覚えている。

女であることで抱えざるを得ない苦しみや悩みを共有できたら……という期待は見事に裏切られた感じだった。その問題を考えるためには、スッピンでモンペでなくてはいけないらしかった。女性関係の本をたくさん読んでいなくてはいけないらしかった。うっかり自分の思ったことを口に出す場所ではないらしかった。自分たちが一生懸命やっているのはわかるけど、一生懸命じゃない人や自分たちと違う人たちに対してとても排他的なものを感じた。

しかし、ゆくあてもなく、しづしづ何回か顔を出してみたものの、やはりなじめず、考えていた以上にコトは複雑なのだなあとも痛感していたころである。この集会のノリでない、でもきちんと等身大で女性、自分、の問題を考えていこうというミニコミ『CHOISIR』に出会ったのであった。『CHOISIR』には集会ノリの胡散臭さがなかった。建て前でなく本音でぶつかりあうところがあった。理屈でなく、自分の感じる気持ちを大切に、そこから出発しようというところがあった。参加者一人一人が自分と向き合い、時には自分に刃を向けながらも、必死に自分の問題と関わっている、というような。

『CHOISIR』は、いまだに建て前の域から脱していない女性の運動が多いと思われるなか、非常に貴重な存在であったのではないかと。今号で閉刊ということでも残念だが、今までの実績は消えないし、これからは「ヘテロティカ」に引き継がれていくと思う。私も微力ながら「ヘテロティカ」に参加し、「私の問題」と向き合っていきたいと思っている。

# 田中博美

ツバメの子が育って、晴れた夕暮れの電線にとまって遊んでいます。お仕事がお忙しいとのことですが、元気で過ごされていますか。

『CHOISIR』が閉刊ということで寂しいです。考えてみるに、私が『CHOISIR』を読もうと思ったのは、ひとつは、もう卒業したとはいっても、長い間耽溺していたやおいをゲイの人が「死んでしまえばいい」と言っているのはなぜなのか、その気持ちを知りたかったからでした。

もうひとつには、今まで女であるということを引き受けなくて生きてきて、そこから卒業しようという時期にあたり、フェミニズムに触れてものを考えたいと思い、いきなり未知の世界に迷い込むのではなく、ここで語られる女の人の言葉を通して社会勉強したいなと思ったのでした。

『CHOISIR』は私にはエキサイティングで、はじめて触れる考え方や思いがいっぱいでした。

これからヘテロティカに力をそそがれるそうですが、それならば今度は「ヘテロティカ」の読者になりたいと思います。

でも『CHOISIR』よりエッチって大丈夫だろうか。『CHOISIR』でも、処女の私にはよくわからないことがあるのに。けど、だからなお、後学のために読ませていただきたいと思います。

46号では、私の長い投稿を載せていただいてありがとうございました。

T. N. さんの生理関連の手紙は勢いよくて、「気持ちわかるう」と思いました。でも、世の中には生理が重くて、その日はシーツの上にビニールシート敷いて寝てなきゃだめってくらい量の多い人もいますので、おしっこのような流れる人がいてもおかしくないかも。広い世の中にはティッシュとレースの紙ナプキンで羽根つきナプキンつくる、頭はいいけど物知らずな女の子がいてもいいし、かわいいと思う。今まですごい生理不順で、めったに生理がなくて、それがたまたまた来たのかもかもしれない。

で、男の人にも生理のこと教えろ！と言われていて、確かに学校でもある程度教えたほうがいいのかと思います（今はけっこう進んでいるのよ、学校によっては）。

でも、今年の春、職場の人たちと飲んでいて旅行の話になった時の話です。年上の女の人が男の人たちに「彼女は、旅行という生理でつらいんですけど」と私のことを言うので、ぎゃー、そんなこと男に言わないでほしいなあ、もう、と思ったのですが、結婚している彼らは女の生理が日常生活の一部で、よくわかっているし、淡々としたものなのです、これが。

男の人と暮らすことによって女の人は男の生理とつきあうわけだけど、同時に彼も女の生理とつきあうわけです。そうして知った知識は、お勉強して知ったのでない、思いやりと暖かさをともなったもので、知識とはかくあるべきかも、と思いました。

でも、若い無知な男の子とつきあう身になったら、ペーパー上でも授業でもいいから、こいつに教え込んでおいてほしかったぜ！と思っちゃうかも。

それでは最後に、長い間お疲れさまでした。これからもよろしくお願いします。

## 佐藤まや

いつから『CHOISIR』を読み始めたのか、はっきり記憶していないのですが、当初は目からウロコが落ちる思いで貪り読んでいました。

自分のちゃんと言葉にできない、でもすごく苦しい行き場のない思いに重なることがここでは語られていて、それを読むうちに、その思いを自分なりに見つめ直すことができたことは、今の私にとって、とても大切な経過でした。

自分が女でヘテロである、という事実は否定しても始まらない、そういうことも全部含めて「私」なんだから、それを認めて引き受けようと思えるに至ったのには、『CHOISIR』のさまざまな特集がきっかけになっています。

こうやって自分がタフになれて、今とてもうれしいのです。ほんとうにありがとう。

me&CHOISIR  
me&CHOISIR  
me&CHOISIR

## 橋富弘子

『CHOISIR』を購読させていただいて、ちょうど一年になります。閉刊ということで、とても残念に思います。せめて、もっと速くから『CHOISIR』を知っていればよかったです。

『CHOISIR』は閉刊されても、女性の社会的問題はさまざまに存在し、それぞれの女性の心の中に意識され続けていることでしょう。ですから、私はまた『CHOISIR』のような場が生まれてくることを望みます。短い間でしたが、一年間『CHOISIR』を送っていただき、どうもありがとうございました。重ねてお礼申し上げます。

# ヨーコの夢は夜ひらく 小口容子

十五、十六、十七と、

あたしの人生暗かった

過去はどんなに暗くとも

夢は夜ひらく

「王女の夢は夜ひらく」より

（あたしのカラオケの十八番だ！

場が暗くなるぞー）

二十歳くらいの時って、あたし、フェミニズムきらいだったのよね。なんか、男に対抗することのできるよーな、頭のいい人たちのやつてることが見えて。ものごとを論理的に考えることが苦手で、他人に関する想像力を持たないあたしにとって、女の立場の普遍性を説かなきゃなんないフェミニズムって、なんか一段上で、高級なもののような気がしてイヤだったわけ。二十代後半まで、自分と惚れた男のことしか興味がなかったの。他人の幸せ・不幸せなんて、どーでもよかつたわ。他人の幸せにまで、「女性の地位向上」なんて名目で、かかずらわなくちゃなんないフェミニズム、なんてエラソーできらいだった。最近、大人になったみたい、だって自分がフェミニストだって認めちゃうわ♥！（…他人は認めてくれないかもしれないが）

「自分が女であること」は、世の中を生きていく上でのいちばんの「障害」ではなかったのよ

ね。親から「女の子は女の子らしく、目立たず控えめに生きていくように」と言われることも、せけんの男の子が、かわいく従順な女の子を好きらしい、という一般常識を知ること、あたしにとって、別に決定的なことじゃなかった。そんなことよりもっと初歩的なところで、他人とうまく関われない、皆がフツウにできることができない、皆がフツウにわかることがわからない、も思ったことをちゃんとしやべれない、って劣等感が子どもの時からあって、せけんに対する緊張が高かった。友達欲しいし、男にも好かれたいし、人並みに幸せになりたいから、かわいい女の子になろうとするんだけど、現実にはあたしの頭の中とはかけはなれている。頭の中は少女マンガの世界が繰り広げられているだけなので、あたりまえなんだけど。ちなみに、一人で少女マンガの世界やつてる人は、かなりコワイ。ぬけないのよねー、好きな人のカッコイイ姿——たとえば外国人記者クラブで、ペラペラ英語をしゃべる上祐さん——を思い浮かべながら目をきらきらさせて、「あのときのあなたをもしあの日見なかったら、今あなたの姿を見ることができない苦しさを感じることもなく、私は過ごしていたでしょう……」とか、縦書きでモノローグしちゃう癖……）

男だったら、おたくになつていたかなあ。市役所に勤めて（残業がないからさ）、帰りにエッチなビデオ借りて夜中に一人で見て、夏はコ

# me&CHOISIR

ミケに行くのだ！（……おたくの方、紋切型で  
ごめんささい） 男だったらさあ、がんばつ  
たりなんかしたくない。別にやることなんてな  
い。自分の世界に没頭していたほうが楽しいも  
ん。わざわざハズれるてみることもないし、フ  
ツウよりダメだっていい、べつに。

しかし、女であったあたしは、みんなに好か  
れる明るくかわいい女の子になりたくて、でも  
どうにもうまくできなくて、クラスの女の子が  
ほとんど簡単にそうできているように思えて、  
くやしくてくやしくて人を羨んだり妬んだりひ  
がんだり頑張ったりばかりしていて、ますま  
す、明るくかよいい女の子から遠くかけはなれ  
ていくのであった。暗くて性格の悪い女の子に  
なった私は、「変人」とかクラスのバカ男に呼  
ばれたりして、そーか変人つてのもひとつの価  
値だなど思つて、それから変人に徹することに  
してみた。だって、男に好かれたいなら、いつ  
そ変人のほうがいいわ。ひがみつばいおの思考  
が短絡なのは、もつて生まれた性質らしい。そ  
して、世の中の変人の人たちとつきあつてみた  
ら、わりとすんなり溶け込めた。どうやら、後  
天的な変人は、私のようなすねに傷もつ人たち  
ばかりらしかった（先天的な変人は、ほんとい  
によくわからないので、言及できない）。世の中  
からハズれた人たちとは、同じ言語をもつかの  
ように話を通じる、ような気がしていたが、そ  
のうちだんだん、あることに気づいた。すねに

傷もつ劣等感のあるやつほど、女をバカにして  
いるし、女に過大な幻想を持つているのだ。し  
かも、女はダメだとか、だから女は、といった  
ことを、ストレートに口にするのを美德だと思  
っているからもなおさら始末が悪いあたしは  
そのなかで、自分の女の部分を否定して、「あた  
しは女じゃないもん」つて力オしてるのに疲れ  
てしまった。女が生きてくうえで抱えてしま  
う普遍的なものについて、もつと女と語り合  
いたと思つたし、共有できるものがあるかもしれ  
ない、と思つた。

『CHOISIR』を初めて読んだのがそのこ  
ろだった。それから、誌上に思いのたけを思い  
つきりぶつけた文章を掲載していただいたりし  
て、『CHOISIR』を読んだ人と会つたりす  
ると、「小口さんつて、すつごい暗くてドロドロ  
のヘンな人なんじゃないかと思つてたけど、ま  
ともでふつうの人でほつとしたわー」などと、  
喜んでいいのか悲しんでいいのかわからないこ  
とを言われたりしたことも、今となっては美し  
い思い出です。♥

『CHOISIR』はあたしにとつては、あた  
しのフェミニズムを確認する作業をさせてもら  
った、貴重な場だった。なくなるの、とつても  
寂しいけど、あたしはあたしで、前を見て歩い  
ていくわ。ほんとは、前を見るようなガラじゃ  
ないんだけどね。

# 佐藤雅樹

『CHOISIR』、長い間、お疲れさまでした。

ぼくにとっても『CHOISIR』との出会いは大きかったです。

といっても、ぼくにとってのCHOISIRは、複数メンバーによるCHOISIRではなくて、CHOISIR=色川、なんだよね。色川を通してぼくはCHOISIRと関わり、「やおい論争」が始まった頃から、色川と他のメンバーとのあり方の違いが明確になってしまい、結局、みんなCHOISIRを離れて行って、CHOISIRは色川の個人誌になってしまった。構成メンバーの一人だった掛札は、出会ってすぐ、ぼくと一緒にOFFICE OUTを設立してしまい、『LABRYS』を発行していったので、ぼくにとって彼女は「CHOISIRの人」というよりは「LABRYSの人」でした。だから、やっぱり、ぼくにとっては、CHOISIR=色川です、そして、CHOISIR、色川、この両者との出会いは、ぼくにとって、とても大きいことでした。

CHOISIRと色川に出会わなかったら、ぼくは文章を書いて発言したり、ゲイのミニコミ誌『KICK OUT』を創刊したりしなかったでしょう。この出会いがあって、掛札とのOFFICE OUT設立へと至るのですから。

本当に、CHOISIRと色川、別々に出会っていても、ぼくの現在はもっと違ったものになっていたかもしれません。そもそも、色川からCHOISIRに原稿依頼されなければ、ぼくは自分が文章で何か発言できるなんて思いもしなかった。

ぼくはずっと「絵」のほうに関心をもっていて、「文」というものに偏見を抱いていたので、文章表現というものに自信も関心もまるでありませんでした。それまでのぼくがめざしていたのは、どちらかという、可能な限り、表現物から言葉を締め出していくことだったのです。以前、反原発のチラシを勝手に着くって職場で撒いていたときも、マンガという手段で、できるだけビジュアルでイメージさせようとしていましたので、言葉はぎりぎりまで削り取ってしまいました。

それまで、「文」だの「発言」だのというものは、インテリや社会運動家などの特別な人たちが使うものだと思っていました。反原発のチラシを撒いていてそんなふうにするのもヘンだけど、ぼくにとってあの行為は、いわゆる「運動家」に対する反発から始めた行為だったんです。だから、最初から版としと期限を決めた「シロートの運動行為」ということにしていました。だって、「活動家」「運動家」の人たちの使う言葉って、偉そうで、小難しく、押し付けがましく、独善に満ちていて、本当にわかりにくかったんだもん。もっと違う表現があるんじゃないか。頭ごなしに「～すべき」なんて価値を押し付けなくても、事実を並べて伝えるだけで、判断は受け手に委ねたほうが、はるかに伝わるんじゃないか!? || まあ、そんなこんなで、「言葉」に対する不信感が強かったんですね。

原稿依頼をされたときに色川からもらったCHOISIRを読んで驚いたことは、「わたし」という言葉で、女性が自分自身のことを語っていることです。「自分自身を語る」的なことはゲイ・サークルでもやったことはあったけど、それが「文」でもできるっていうのは、ちょっとした驚きでした。これは、やっぱり「女」の言葉なんだろうな。これまで知っていた言葉っていうのは、強引に論理的、社会的を装ってたりしていて、なんか「わたし」っていうのがボケていた。結局、ぼくは、いわゆる「男言葉」ってやつが嫌いだったんだらうと思う。「わたし」っていうものが見えない言葉には、ぜんぜん関心がもてませんでしたから、好きになる作家や評論家、アーティ

ストは、すべて「わたし」という言葉で語る人たちでした。でも、そういう言葉を、ふつうの人たちが語り合う場があるってことは、やっぱり驚きです。なにも偉そうな言葉を使わなくても、普段しゃべっている話言葉そのまままで、自分が言いたいことを、自分が言いたい言葉で素直に話せばいいということ。そして、発した言葉に、言葉が返ってくることのおもしろさ。

CHOISIRと出会ったことで、「言葉」を太くてい多数に向かって発する、ということと、そういう言葉を発し合い、交換し合う「場」ということは、欲しければ簡単に自分で尽きてしまえるんだということ——この二つを発見したばかりは、数ヵ月後には、もう『KICK OUT』を創刊していました。出会いとは、かくもドラマチックでおもしろいものです。

『KICK OUT』を始めてからも、「一人じゃない」っていうのは心強かったし、楽しかったですね。KICK OUT、CHOISIR、LABRYSとあって、みんなそれぞれ頑張って発信していて、そんなことがすごく励みになったは、合同のイベントなんかを企画して、とても田飲みし買ったです。もう、ほとんどぼくにとってはCHOISIR=色川、LABRYS=掛札だったんで、その前提（必ずしも、それだけではない部分は、もちろんありますけど）で、どんどん話を進めてしまいますが、彼女たちとの出会いは、やっぱり大きかった。

なんていっても、ぼくは「女の問題」にそれまでまったく関心がありませんでした。関心がない、っていうより、そんなもんがあるってこと自体、よく知らなかった。「やおい論争」やっていて、はじめて「女の問題」ってやつと直面させられました。そうなって、やっと自分が「男」だ、ってことがわかってきたんですね。まあ、それだけバカだった、ってことなんですけど、そういうことを気づかせられたって、ぼくににとってすごく貴重なことです。ヘテロの色川とレズビアンと一緒で活動していると「ゲイである自分って何!？」って、本当に混乱させられましたから。オネエ言葉しゃべくりながらも、「この言葉って何!？」といちいちパニック起こしていました。ゲイであって「ふつう」なことが、ぜんぜん「ふつう」じゃなくなって、そんなふうには、いろんな性やセクシュアリティが交錯する環境で活動していると、常にいろんなことが問われていって、からこそ「自分って何!？」とか、自分のもっていた価値基準の通用する範囲はどこまでか、どこから先が他人の領域を侵害しているのか、なんてことを必死で考えました。だからこそ、そのぶん、「やおい論争」では手を抜かず、徹底的に「ゲイ」という立場にこだわって発信することにしたんです。

でも、もちろん楽しいことだけじゃありませんでしたよね。ときには、そういうさまざまな性やセクシュアリティの狭間のなかで、自分がとるべき立場や態度がぐちゃぐちゃと、互いに傷ついたりしながら、そうまでして発信することのあてどなさや嘸みしめたりもしました。何のためにそうまでして発信しなければならないのか。黙ってしまったほうがラクなんじゃないか、って。いろんな溝やら違いが横たわるなかで、それでも、ちょっとはラクに向き合えるようになったのって、本当に最近のような気がする。

CHOISIRと出会ったことで考え始めたことは、いろいろな性やセクシュアリティが交錯するなかで自分が生きているということです。そんなようなことをずっと考えながら、これからも、いろいろと活動していくんだと思います。色川のほうも、『CHOISIR』は閉刊しても、今度はヘテロティカでやっていくんだらうから、まあ、今後ともよろしく。でも色川？ あたしたち、最近はそのようなことより、すっかり女装、男装仲間よね！

## らっこ

二七歳で離婚したとき、それまでの自分の価値観が一気に否定されたような喪失感を覚えた。あまりにも何も考えずに、本能だけで生きてきてしまっていたことのツケがまわってきた、と思った。もう一度自分を肯定するために、ようやく頭を使い始め、そうした過程で出会ったのが、フェミニズムであったり、セクシャリティ問題であったり、『CHOISIR』であったりした。

『CHOISIR』を読んでいて、同じように考えている人がたくさんいるのを知ったのは心強かったし、「私は間違っていない」と(勝手ですが)思えたのはありがたかった。

ここ数年考えてきたことは、これから先ずっと、私の仕事にも私生活にも決定的な影響を与えることになると思う。『CHOISIR』に出会えてよかった。色川さん、お疲れさまでした。これからはヘテロティカで。

## 逃亡者A

女性のグループ、女性のミニコミは数多くありますが、ほとんどが自分自身のセックス観を抜きにして(あるいはそういう部分に目をつぶって)物事を語っているのが多いと思います。そんななかで『CHOISIR』は、自分のセックス観を中心に据えているのが目新しく、これからの女性はこうでなければと感心し、長年、読ませていただきました。

このたびは閉刊ということで、残念ではありますが、ひきつづき「ヘテロティカ」のほうを読ませていただきたく思います。

「ヘテロティカ」では”男にこだわっている”とのことですので、ますます私の好きなタイプの女性が増えていくような感じで、期待しています。

年ごとに女性を取り巻く世界環境はキュー曾区に変化しているように思いますが、日本では未だに”結婚がすべて”と思っている女性が多いように思われます。

「政治」「社会」「経済」「文化」「芸術」と、女性の関係を広く浅く総合的に語れる女性が増えることを願っています。

# me&CHOISIR

# me&CHOISIR

## かけふだよりひとこと

「CHOISIRと私」？ う～ん、ひとつには修行の場、だったんでしょうか。私がマスコミ・カムアウトしたのが89年でしょ。だから、「カムアウトしたレズビアン」としての私の足取りはほとんど『CHOISIR』と重なっているわけです。途中で『LABRYS』を創刊して、労力はそちらに行ってしまったけど、その後もちょっとは作業をお手伝いしてたし。

ミニコミである『CHOISIR』にあーでもない、でもないと書くことで、私はあやふやだった自分の立場を（一種むりやりに、ではあるけど）確立して、マスコミに立ち向かうことができたのだと思う（単純な答えしか必要とされていないマスコミで、そんなことはできないから）。そして、二つのまったく違った環境で書くことができたということが、私の精神的平衡にすばらしくよかったのだとも思う。書く、ということのうえでは、そういうこと。

じゃあ、『CHOISIR』とはなんだったんだろう、ということを見るとそれは、私のもう、二〇代後半はなんだったんだろう、ということとかなり重なってしまう。…うーむ。やっぱり今の段階でその答えを出すなんてことはできません！ 『LABRYS』とはなんだったのか、ということなら、答えはかなり簡単なんですよ。ひと言で言えば「運動の中のひとつの戦略」だったわけですから。でも、『CHOISIR』となると、もっとなにか、私の深いところにつながっていて、まだまだ自分ことばにならないような気がします。

……ダメだなあ。あと二〇年経ったら考えてみることにします。でもね、ほんと、簡単には言えないぐらい大切なものだったんですよ。

# やおい論争を総括する。

## 栗原知代

『CHOISIR』の休刊に伴って、「やおい論争」も一応の終焉を迎えるそうなので、最後にまとめという意味で、全体を回顧する内容の原稿を書こうと思います。これまで『CHOISIR』は読んでいても、「やおい論争」にはいまいち関心がないし、何が問題になっているのかピンとこなかった人にもわかるように、まずその経緯を説明したいと思います。

### ●「やおい論争」第一期（やおいのゲイへの加害性をめぐる論議）

まず、この「やおい論争」が始まったきっかけの、佐藤雅樹さんの原稿は、「男同士の性行為を覗き見して喜んでいる、変態女なんか死んでしまえ」というものでした。

そして、フェミニズムは男性のポルノをセクシャルハラスメントだと攻撃するが、やおいもそれと同じことをしているではないか。自分たちの加

害性に気づいてほしい、と、提言しています。

この指摘は、まったくその通りで、少なくともわたしは、完全に同意します。

さて、ということは、この佐藤さんの批判に対しては、次の三つの対応しか考えられません。

まず最初は、反論です。つまり、やおい少女は、佐藤さんの指摘のあったような行為をしていない、というものです。高松さんや柳田さん、またもつと時をくだって谷川さんも、その証明をしようとしたましたが、全員がそれに失敗しました。

さて第二は、弁明です。佐藤さんの指摘はその通りなだけで、それには深い理由がある、といって、やおい少女がやおいに向かうやむにやまれぬせつばつまった事情を説明することです。確かにこれは言い訳に過ぎないのですが、その過程で、やおいとゲイの相互理解が深まるので、論争と

しては実りのあるものでした。

そして最後の対応は、受容しつつ、現状を肯定することです。確かにやおいは安全な場所からゲイの性行為を覗き見したり、いろいろな想像したりして楽しんでるのだが、性の快楽には、ある程度の加害性はつきものではないか。要は程度の問題なんだから、できるだけ実害のないように、それぞれ楽しめばいいのだ。変態、変態というが、煎じつめれば誰だって、ヘンタイではないか。そういつた、加害性と「立派な変態」(©佐藤)であることを、認めるものです。

『JUNE』の一九九六年四月号の伏見憲明さんと柿沼瑛子さんの対談で、柿沼さんが「やおいⅡヘンタイ」説を認めているように、そして六月号のアン・ライスに触れたエッセイで、「やおいⅡ人畜無害の変態」を提唱しているように、たぶんこれからは、この最後の説が、やおい業界では主力になつていくように思えます。やおいはヘンタイ、明るいヘンタイ、楽しいヘンタイ、愉快なヘンタイ、そういう説です。

ただし、『CHOISIR』では、この最後の説を支持する人は、ほとんどいませんでした。それはやはり、『CHOISIR』がフェミニズムのミニコミであつて、「視線の暴力性」や「恋愛に潜む権力関係」などに対して、一般人よりはるかに意識的で、しかもそれに反対の態度をとってきた人が多かったからでしょう。

さて、当初の「やおい論争」は、この第二の対応(弁明)を中心に展開していきました。その過程で、やおいに向かう動機などが語られ、それなりに有意義だったのですが、佐藤さんが要求した「ゲイへの加害性への認識。また、そのうえででの対応」という点に関しては明確な答が得られず、論争は一種のデッドロックに乗り上げました。

この『CHOISIR』二〇号(一九九二年五月)から二九号(一九九三年七月)までが、「やおい論争」の第一期といえます。

### ●「やおい論争」第二期(それでもやおいを手放せない理由)

さて第二期は、高松久子さんの批判に答えて、わたしがこの論争に参加してからです(三〇号 一九九三年九月号)。そして、この後の「やおい論争」の中心は、佐藤さんが提起した問題から離れて、女性がなぜ男同士の恋愛物語をあれほどまでに愛好するか、という、やおいに執着する原因へと移つていきます。

その理由は、佐藤さんの問いかけに、もはや高松さんたちが答えようがなかったということ、高松さんに投げかけられた質問の焦点が、「女性性からの逃避というやおいの構造を自覚しながらも、それでもやおいを手放せなかったのはなぜなのか」というものだったからです。

そして残念ながら、高松さんはわたしの問いに対して十分な答えを出せないまま、論争から降りてしまい、「やおい論争」は宙ぶらりんになつてしまふのでした。

さて、リングに人がいなくなつてしまい、困つてしまったわたしは、とりあえず、いろいろな人のやおい論を紹介することにしました。その過程で、やおいの多様性と、またその共通点を明らかにしようと思つたのです。この試みは、後に谷川さんから「ランク付け」と非難されることになるのですが、わたしのやりたかつたのは、あくまで「交通整理」だったのです。

そしてこの第二期に、元やおい、現役やおい少女からの、貴重な発言が続きます。絵理子さんは、本来レズビアンである自分が、コミケでやおい本を作つていた理由、またそれを辞めたときの周囲の反応を、実感を含めて綴つてくれました。「実は、私が私に於いて、やおいを病だと断定する理由は、生身の人間を前にして決して向かい合おうとはしない、できない自分に気づいたからだ。他の人がこの状態をそれぞれにどう評価しようと勝手だが、少なくとも私はつらかつた。つらかつたから、やめざるを得なかつたのだ」(三七号 一九九四年一〇月号)。

そしてまた、早稲田の社会学部の卒論で「やおい論」を書いたとみいミカさんの説「やおいは、意識上のフェミニズムに、無意識のシンデレラ願望が反逆した形」が、わたしの文章（二三号 一九九四年二月号）のなかで、紹介され、批判されました。

そして、現役やおい少女であり、人気漫画家でもある野火ノビタさんは、やおい少女向けられがちな批判「やおいは現実逃避である」という説の欺瞞と危険性を、徹底的に糾弾しました（三四号 一九九四年四月号）。この点に関しては次の三五号で、野火さんとわたしは、やおい少女の現実認識そのものが、まちがっているのではないか、ということでも合意するのですが、野火さんはその他に、やおい少女の欲望の構図を説明してくれました。つまり、やおい少女は王子様を待っている受け身の存在ではなく、ペンを握るといふ能動的な立場で、「攻め」と「受け」のキャラクターの両方に、自分を投影して物語をつくる。そして、かつて愛されなかった自分自身である「受け」の男性が、この世に存在しない理想の愛の権化である「攻め」の男性より、「永遠不変の愛」を受けることで、トラウマを癒していく、というものです。

さて、もう一人、やおいの欲望の構図を分析してくれたのが、元JUNE作家、野村史子さんこと中野冬美さんです（三九号 一九九五年三月号）。彼女も野火さんと同じように、現実の「女制」に絶望した少女たちが、やおいに救済を求めていく過程を、たんねんに分析した後、それでもやおいを手放せない理由を、「やおいが、女の積極的な性欲を肯定した、唯一のポルノグラフィードからである」と、主張します。そして、やおい少女が欲情する部分が、「男を感じさせる。感じさせた男の顔を見る」ことであると、明言しています。

この中野冬美さんの文章が『CHOISIR』に掲載されたことを『JUNE』で告知する（わたしの仕業ですが）と、現役・元やおい少女の告白が多く寄せられるようになります。佐伯不二子さん、夢路遥さん、山内

啓位子さん、などの文章です。彼女たちの意見は、論争の争点を揺るがすようなものではなかったのですが、それぞれの体験がにじみ出た文章は、確実にやおい少女の多様性を読者に認識させたし、何よりもやおい少女がこういった告白をすること自体が稀なので、とても貴重なものだったと思います。

### ●「やおい論争」第三期（フェミニズムはやおいをバッシングしたのか）

さて、「やおい論争」の第三期は、谷川たまきさんが、「女性学年報」に、「やおい論争」批判の論文を載せてからです（四三号 一九九五年一月号）。これはまだみなさんの記憶に新しいと思うのですが、彼女の論文が『CHOISIR』ではなく、別の媒体に送られたものであったこと、またその内容がかなり物議をかもしもったため、大変な混乱を引き起こしました。

今こうやって、「やおい論争」の概観を書きながら思うことは、彼女の批判がその時点での論争の焦点ではなく、そもそも佐藤さんの問題提起を中心とする、かなり前期の論点に向けられていたため、混乱が広がったのではないかと、いうことです。谷川さんの論争参加を促したときの、「やおい論争」の焦点は、前述の通り、「少女たちがやおいに向かう理由」でした。またその時点では、論争に参加した元やおい・現やおい少女の間では、それは社会の押しつける「女制」からの逃避が根本にある、という同意がある程度できていました。

ところが、それとまったく意見を異にする谷川さんが、論争に参加してきます。しかも、前述のような意見は、「真の少年愛嗜好者」からすれば「論外」であり、またそのような意見を持つやおい少女は、社会の視線に合わせて自分の嗜好を美化・社会化するという、錯覚に陥っている人々だとしたのです。そういう考えを前提に、『CHOISIR』の「やおい論争」

を、少年愛嗜好者に対する悪質なパッシングだと非難しました。また、その論拠を、『CHOISIR』の反やおい論客（佐藤・色川・栗原）がいかに「真の少年愛嗜好者」から隔たっているか、に置いたため、ますますややこしくなりました。

さて、その後の論争は、内容ではなく、議論をする際の心構えや言葉づかいや礼儀作法の部分で、意見が噛み合わなくなってしまう、結局、そのことに対する憤りの文章を書いたまま、谷川さんは論争から降りてしまします。

第一期で、佐藤さんと色川さん、高松さん、また第二期で、わたしと高松さん、柳田さんの論争の過程で、同様の問題が持ち上がり、話がなかなか先に進まなくなってしまったことがあるのですが、あのときもこのときも、デイベートの難しさというのを痛感しました。

正直にいうと、わたしはなぜ谷川さんが、前述の「女制」からの逃避（谷川さんの命名によるとシミュレーション説）をくつがえすような、自説の展開に力を注がないのか不思議でなりません。『CHOISIR』四〇号でも紹介したように、彼女は前エディプス説という、やおいの原因に関する独自の理論を持っていたのです。この説はかなり難解なものです。一言でいうと、「少女たちがやおいに向かう原因は、前エディプス期（はつきりとした記憶がない乳幼児期）に、母親に感じたエロスの同性愛感情に対する忌避である。したがって、実際の恋愛経験とは何の関係も無い」という説です。

もしこの説が、前記の「女制」からの逃避説よりも説得力を持つと証明されれば、必然的に谷川さんの主張するやおいパッシングは止まります。また、本気でその「パッシング」を根絶したいなら、自説で相手を圧倒する以外にないのです。

それなのに、なぜ谷川さんは、フェミニズムがやおいをパッシングした、世間一般より反動的なフェミニズムは基本的な人権意識さえ欠いている、

と、本来の論点よりはずれたところばかり問題にするのだろう、と、ずつと首をひねっていたのです。

わたしは今でも、『CHOISIR』の「やおい論争」の、どこがパッシングだったのか、よくわかりません。たしかに、きつい言葉も使われましたが、「少年愛嗜好を持つ女性たちを一律にカテゴリー化し、ネガティブなレッテル貼りを行った」というのは、何を指しているのか、わかりません。谷川さんのいうシミュレーション説を唱えること自体が、やおい少女をフェミニズムによって救われるべき劣等者と見なしている、したがって差別的である、と結論づけられると、「そんなアホなく！」と、叫びたくります。

ともあれ、最初はどうにか議論を建設的な方向に戻そうと（やおいの原因の探究に、論題を戻そうと）がんばっていたのですが、そのうちにちよつと無理なんじゃないかと思ひ、軌道修正することにしました。それで、なぜ谷川さんが、あれほどフェミニズムにパッシングされたと言いたてるのだろう、ということも議論するのも意味があるのではないかと思ひました。その線で書いたのが、四五号の原稿です。

そこで書いたことの繰り返しになるかもしれませんが、谷川さんは、少年愛嗜好の原因を本人の恋愛経験と結びつけられると、ヒステリックに反応するということです。でもそれって、不可能じゃないかな。だって、やおいのテーマって、あれほどあからさまに性愛なんだもの。そういうものに耽溺している人に、「で、実際の恋愛のほうは、どうなってますか？」と、訊きたくなるのは当然じゃないかな。もちろんそこで、あえて訊かないでおくという礼儀はあるだろうし、やおいを読む男に不自由、と結びつけるのも早急です。でも、あれだけ特殊な恋愛モノを書いたり読んだりしている行為と、その当事者の恋愛状況が、完全に無関係だと言ひ張るのは、ちよつと無理がある。やっぱりそこには、何らかの関係があるし、それを追求するのは、やおい少女に対するパッシングでも何でもないし、

人権意識を欠いていることにもならないと思います。

谷川さんの前エディプス説にしても、そういう傾向が皆無とはいえないけど、後半の「だから、実際の恋愛経験には関係ない」ということを導くための、詭弁ではないかと思える部分があるのです。他のやおい少女が、「やおいに興味で、あくまで趣味で、だから実生活とは無関係」と、あれほど言い張るのと同様に。

たぶんフェミニストはそういうやおい少女に対して、「で、現実には、あなたはどつしたいの？」ということを読めから、彼女たちから嫌われるんじゃないのかしらねえ。

しかし、谷川さんからの返答がないまま、「やおい論争」が尻切れトンぼで終わってしまうのは、とても残念です。この論争が、将来、どのように評価されるか、あるいは無視されるか、ここで出た意見が後の議論で受け継がれるか、あるいは否定されるか、わかりませんが、この終わり方は、いまいちでした。

### ●終わりに

さて、最後に、わたしがこの論争で得たものについて書くことと思います。それは、自分の限界を知ったということです。たぶん読者のなかには、なぜあそこまでやりあわなくてはいけないのか、と疑問に思った方もいると思います。そうでなければやはり、自分という人間が見えてこないのです。つまり、自分の主観を他人の主観と徹底的に戦わせてこそ、客観が生まれるのです。

限界という意味で、ちょっと話はそれますが、前述した「やおい論争」の概観も、わたしの視点から見たという意味で、限界のあるものだと思います。論争に意見を寄せてくれた人のなかには、なんでわたしの主張がと

りあげられてないんだ、と不満に思う人もいるだろうし、高松さんが「開かれた議論が可能になる」と歓迎した市川恵里さんの「ゲイ・ステレオタイプ批判論」(二一九号 一九九三年七月号)も、本筋としてはとりあげていません。

ただ、この市川さんの提案に基づいて論を進めるには、やはり高松さんの場合、「ゲイへの加害性への認識と、そのうえででの対応」という問題がクリアされていないことが問題になります。どのイメージがOKで、どのイメージがNOか、という議論は、エロスの消費における加害性を容認できる同士で初めて可能になるのであって、彼女の場合は条件に達していません。佐藤さんの命名による「立派な変態」のやおい少女だけが、それをする資格があるでしょう。

さて、話を元に戻しますが、わたしが認識したわたしの限界とは、わたしが救いたいほど「個人主義」で「理想主義」な「近代人」であることでした。最初谷川さんに指摘されたときは、むっとしたのですが、オウム事件に対する友人の反応などを見ると、いかに自分がポストモダンの影響を受けていないか、また同年代の知識人と立場を異にするかに気づいたのです。

しかしわたしは、近代人であることを、恥じてはいません。わたしは自分自身を、いろいろな意味でマイノリティに属する人間だと思いますが、前にも書いたように、わたしは、社会はマジョリティではなく、自分のようなマイノリティを含めて成り立っていると考えているので、妙な疎外感を感じないで済むし、実現不可能な理想でも、理想を持ち続けるからこそ人間だと思っているのです。変に幻想と現実を対立させたり、幻想と現実の逆転を図つたりしなくて済むのです。

ただ、「やおい論争」において、近代人である自分の思想が、色濃く出ている部分があるな、というのは認識できました。たとえばわたしは、社会というのは、成熟した個人が、それぞれ正当だと思つ意見を戦わせること

で、世論が形作られていき、健全に機能すると信じているのです。いまだき、こんな人は少ないのではないかしら。

だからこそ、わたしは、自分が「愛態」であるのも、「子供」であるのも、「オタク」であるのも、嫌なんです。わたしは常に「成熟した個人」になりたいし、そうでなければ意見が社会に通用しないと思ってるんです。

もうひとつ、他の人と違うなあと思う部分は、わたし個人や、自分の属する集団が、「なんかよくわからないけど、とりあえず無害だから、いいや」というような、中途半端な認められ方をするのが嫌なんです。たとえば、やおいだった頃のわたしは、自己分析をつきつめていった結果、最後に残った部分は自分にとって絶対的な真実なんだから、すべての人に普遍的な真実として認められなければならない、という強烈な信念を抱いていました（あー、ちょっと、恥ずかし）。

でも、やおいにしてもゲイにしても、「人畜無害な、わけのわからない集団」として社会から容認するよりも、社会の一般通念を照射するような、普遍的な概念を提示しなくては、つまらないじゃないですか。

たとえば、かつてのゲイ文化が提唱し、山田詠美や桜沢エリカ経由で、八〇年代の日本に定着した概念は「愛はカラダから生まれる」というものでした。

もしやおいが、同様の概念を提示できるとすれば、それは「女のエロスの王道はナルシズム」というものではないかと思えます。

実はこのことは、カミール・パリアアの『セックス・アート・アンド・アメリカンカルチャー』を読んで以来、ずっと考えていることなんです。パリアア自身、すごくやおい的な人ですね。子供の頃、『聖セバスチヤンの殉教』の絵を見て、身を貫くような強烈なエロティシズムを感じた、ですとか、若い頃からずっとゲイに親近感を抱いていて、友人も多かった、というところですかね。

つまり、かつてのわたしも含めて、やおい少女というのは、そういう芸

術表現を見て、しびれるような強烈なエロスを、確かに体感しているのです。彼女たちはそれを、体の奥からこみあげてくる本能的な性欲と認識しているのですが（それほど強いものです）、ひよつとしてそれは、芸術家が啓示を受けたときに感じるような、世界との一体感に近いものではないか。また、二四年組の少女漫画家が描き続けた「愛」も、この流れにあるものだったと思います。そしてそれは、そこで想定される「世界」が、本当は彼女たちの自我の延長であるという点で、かなりナルシズムに近いものなのです。

そういうエロスは、実際に他人とつきあったときに感じる性欲とは、かなりちがっています。だからといって、そういうエロスを、劣等のものだから、非現実的なものだからといって、軽視するのはまちがっているのではないか、というのが、最近のわたしの考えです。これだけ多くの芸術家やおい少女、そして一部のゲイが共有しているエロスなのだから、それはけっしてまやかしのものではありません。

そもそも、これまでの女の人生を振り返ってみると、少女の頃は宝塚スタアに憧れて、見合い結婚してからは、映画スタアに胸をときめかせる。女の情動のほとんどは、そういう見るエロス、憧れるエロスに費やされてきたのではないのでしょうか。だから、やおいのエロスは、けっして特殊なものではなく、女のエロスの王道なのです。

ともあれ、わたしは『CHOISIR』の「やおい論争」に参加できてほんとうによかったと思っています。いろいろな人と意見を戦わせるうちに、自分の思考が深まっていく、という知的活動の基本が味わえたからです。

願わくば、これがここで切れることなく、またどこかで続けられたら、というのが本音ですが、とりあえず今はひとまず、グッバイ。Good Luck!

## これでおしまい。みんな、元気でね。 色川奈緒

一九八九年末に中絶可能時期が二週間短縮されるという話が持ち上がり、それまでいっさい「市民運動」なるものと無縁に生きてきたノンボリの私（都内で唯一と言われる、立て看の一個もない大学に通っておりましたの。エセお嬢様としてよ）、なぜか著名運動とか厚生省交渉とか集会なんかをやっちゃって、でも、むずかしい医学用語や法律用語が飛び交うなか、なあんか性的話はオープンにされていなくて、ものごとの本質ってこういうところにあるのかしら、ってずっと思っていたのね。もちろん、それまで思っていたように「政治なんて、あたしの人生にカンケーないわ」っていうのは大間違いだったんだけど、だからって厚生省の役人つかまえてプリプリ言うっていうのは一面的だわ、っていうのもあったわけ。

当の中絶可能時期二週間短縮で、もつとも困った事態に追い込まれるのが、妊娠しても誰にも相談できないとか、まさかと思いつけている間に取返しがつかないギリギリまで腹がでかくなっちゃうとか、10代〜20代前半の女性たちだというのは統計的に出ていたのね。それで、そういう女の子たちにとっていちばん大事なのって、性的話をきちんとできる場所と確かな情報なんじゃないか、って思った。それでCHOISIRという場所をつくりましたんですよ。

今だから申し上げますけど（あら前も言ったかしら）、フェミニストのなかには、妊娠22週未満になるまで自分で対処できないような人間がセック

スするのは解せないとか、だいたい避妊を言い出せないような女が未だに世の中に存在するのかとか、10代でセックスするなんて早すぎるとか、そういう話も出てたわけ。だから、かつて経済条項が削除されようとした時ほど、このときの優生保護法改悪に反対する動きって盛り上がり欠けてたと思うし、新聞の扱いもとっても小さくて、ヘタすると（いいえ、たぶん絶対よ）事実を知らない人はすごく多いと思う。

結局、中絶できる時期はそれまでの妊娠24週未満から22週未満に変わってしまった。こんなもんかいなーと思つて、運動熱が冷めたところは確かにあったわねえ。ちよつと前も、優生保護法が母体保護法なんてふざけた名前になっちゃった（優生思想の削除はもちろん良いのですが）時も、なんだかなーと思つたわ。ずつとずつと運動してきた人たちがいて、このありさまかい、って感じだった。もともと運動に向いてないっていう話ももちろんある。だって私、楽しいことしか、したくないんですもの。

初めはおしゃべりしてるだけの場だったCHOISIRが、直接会えない人たちともつながっていきたいということで、会報『CHOISIR』を創刊したのが一九九〇年六月。このころは、いわゆるフツの女の子たちに読んでもらいたいって思ってたのね。1号目は知り合いに巻くだけのスタート。でも、若い世代たちが何か始めたっていうんで、けっこうウケよくて、でもその評判いいのは、長くりブとかフェミニズムの運動をやってきた人たちの間で、だった。ようするに、いわゆるフツの女の子が『CHOISIR』を読むわけはなかったのよ、オホホ。でも、だんだんと王道フェミニズムの横暴さに辟易した人たちが読者になってくれて、やっと望んでいた場所づくりができた、って感じだったな。

いま創刊号読むと、大笑いよお。コミュニティオンとしてのセックスを大事にしたい、ってなこと元気よく書いてやんの。囚われてたわねえ。フェミニズムもこれでつまづいて、それっきりって感じだったわねえ。

そんなこんなで、初期の頃はマジメに優生保護法関係のこと、文章にし

てた。マスコミ・ウォッチングしてたし、敵であるところの生命尊重派の動きを見に、わざわざ偵察に行つて報告載せたり。レスピアニズムを究極のフェミニズムとする言い分に文句言つたしな。九一年から、同性愛者たちとの付き合いが深まり出した。「有害コミック」問題にも関わつたし、AV女優の人権を考える動きにも参加したわー。やおい論争が勃発したのが20号（九二年五月）。26号（九三年一月）から特集を設けるようになった。32号（九三年十二月）でグループは解体、『CHOISIR』は個人誌になった。一年後には、発行を辞めようかと迷つたわね。そして、こないだの46号。丸6年、『CHOISIR』と関わつてきたというわけね。

いろんなことがありすぎて、いっぺんには語れせんわ。私自身もずいぶん変わったところもあるし、ステキな思い出ばかりじゃないし。6年も経てば、恋人も友達もいろいろメンバ―チェンジがございますわね。

前日も書いたけれど、『CHOISIR』に向けた余力がなくなつてしまつたの。両立していくもりだつたんだけど、昨年から新しく始めた「ヘテロティカ」を続けていきたいという気持ちのほうが勝つてしまい、『CHOISIR』は今号にて終わりにさせていただこうと決心しました次第でございます。

初めの頃から読んでくださった皆さん、そしてもちろん、途中からお付き合いただいた皆さん、どうもありがとうございました。一方的なお願いに応えて、投稿したり手紙を送つてくださった皆さんには、特に感謝しております。

以前どなたかが、女性誌の読者欄が拡大されて一冊になつたような感じだと『CHOISIR』のことを評したことがあつたけど、ま、それよりはもちょっと高尚だつたと思うんだけど、当たらずも遠からずかしらね。今後は「ヘテロティカ」という場で、いろいろ発信していくつもりですの、よろしかったらぜひそちらでお付き合いくださいまし。

最近つくづく、女性たちは性の話をオープンにする場を持っていないと思うのです。周囲の人間はベラベラと、聞いてないことまでしゃべつてくれるけど（時にかなりお下品ですわ）、一歩外に出ると、未だにセックスのことを「あのこと」とおっしゃる若い女性がいたりして、めまいがするです。少なくともヘテロティカは性の話をオープンにできる場ですわ。それ以外のヘテロティカの存在意義については、「ヘテロティカ」4号をお読みくださいな。

CHOISIRにはフェミニズムの看板が、望むと望まざるとついでにしまったのですが、それというのも「どんなミニコミ？」という質問に手取り早く答えるのにフウミニズムという単語が出てきてしまったから。でも、それもイヤになつてきてしまつてね。だって私、フェミニズムって、だんだんわからなくなつてきてしまつたんですもの。

当然と言われるでしょうけれど敢えて言えば、ものがフェミニズムだけで解釈される場所にいたくないのですよ。世の中、フェミニズムで切れることだけで回っているわけじゃないからねえ。たとえば町中でウリやつたり、アンダーグラウンドで下着売つたりする女子高生に、倫理とか道徳とか持ち出してきてもしかたないでしょ。それがPTAノリだろうとフェミニズムノリだろうと、意味ないわけ。彼女たちが腐つているとすれば、私も全員腐っているわけだからねえ。

だから、もつと違うアプローチを探したいと思つたわけ。で、とりあえずCHOISIRは店じまい。

もつともつと言いたいことがあつたような気もするのですけれど、止めると決心したらスッキリしちゃつたのと、相変わらずバタバタ忙しくして、今回もだいたい発行が遅れているので、ここらへんで閉めさせていただきます。

本当にどうもありがとうございました。どうかお元気で。

## 「CHOISIR」バックナンバー 主な内容

1～25号までは1部200円、26号以降は1部300円です。ご希望の場合は、送料が別途必要です。

1号	創刊の言葉／中絶できる時期が短縮される！／とりとめのないセックスの話	売り切れ
2号	特集「売春・買春」／とりとめのないセックスの話2	売り切れ
3号	「生命尊重」ミュージカル報告／産婦人科体験記／とりとめのないセックスの話3	売り切れ
4号	映画「主婦マリーがしたこと」／出生率低下シンポ報告／とりとめのないセックスの話4	売り切れ
5号	レズビアニズムは究極のフェミニズム？／男につける薬はない？／とりとめの～5	残部僅少
6号	フェミニズム再考／「主婦」ってほんとにステイタスシンボル？／映画「シバジ」	売り切れ
7号	日本の男がアジアの女を買うこと／「全人格コミュニケーション」としてのセックスだなんて！	
8号	国際生命尊重会議が開かれる！／とりとめのないセックスの座談会	売り切れ
9号	フェミニズム再考／とりとめのないセックスの話7	売り切れ
10号	元（？）オコゲのため息／やおいという病い	
11号	非嫡出子の相続差別／産まない自由と女の生き方／今月のストコドッコイ	売り切れ
12号	フェミニズム私論／今月のストコドッコイ／家族について思うこと	売り切れ
13号	勝手にシネマ「おもひどぼろぼろ」／ねえねえ、それで、「欲望」はあ？	売り切れ
14号	誰が決めたの、「有害コミック」？／とりとめのないセックスの座談会／勝手にシネマ	売り切れ
15号	特集「女と男はわかりあえるか」／「女の事情」は極論なわけえ？／とりとめの～11	売り切れ
16号	わたしの気持ちいい性表現って？／男の語るフェミニズムを読む	売り切れ
17号	「有害コミック」問題のいま／コドモより「私」が大事と思いたい／暴力について	売り切れ
18号	30代・私の思春期／女の女に対する「性的いやがらせ」	
19号	“ことばフェチ”往復書簡／適度な愛し方がわからない／セックス依存症候群	売り切れ
20号	とりとめのないセックスの座談会／ヤオイなんて死んでしまえばいい	売り切れ
21号	“ことばフェチ”往復書簡／やおい論争	残部僅少
22号	やおい論争／“ことばフェチ”往復書簡／それはずいよ、上野さん／勝手にシネマ	売り切れ
23号	やおい論争／“ことばフェチ”往復書簡	売り切れ
24号	きれいな裸、きれいなカラダ／やおい論争／胎盤料理頼末ノ記	売り切れ
25号	“ことばフェチ”往復書簡／勝手にシネマ「きらきらひかる」「おこげ」	売り切れ
26号	特集「ポルノグラフィー」／主婦の私が考えたこと／男はなにをせなあかんのか	
27号	特集「男と暮らす」／やおい論争／おれの“カムアウト”	売り切れ
28号	特集「リップと私の関係・無関係」／やおい論争	売り切れ
29号	私の恋愛幻想はポロポロである／やおい論争／勝手にシネマ「野性の夜に」	
30号	特集「働くということ」／やおい論争	
31号	特集「SEX・SEXLESS」／やおい論争	
32号	特集「メディア」／やおい論争	
33号	特集「家族」／やおい論争	
34号	特集「性自認」／やおい論争	
35号	特集「バイセクシュアル」／やおい論争	
36号	特集「産む・産まない」／やおい論争	
37号	特集「夫婦別姓」／やおい論争	
38号	特集「主婦」	
39号	特集「レイブ願望と強姦神話」／やおい論争	
40号	特集「噂のCMを読む」	
41号	特集「結婚・ケッコン・けっこん」／やおい論争	
42号	特集「異性愛のフシギ」／やおい論争	
43号	特集「やおい論争とCHOISIRをめぐるバトル・ロイヤル」	
44号	「対談・成育過程に音楽が及ぼす影響」／やおい論争	
45号	特集「アンケート・性情報」／やおい論争	
46号	特集「低容量ピル、どう思う？」／やおい論争	

番外	
別冊CHOISIR「やおい論争」	
I	=800円
II	=800円
III	=700円
IV	=700円

## 購読料について

前号でお知らせしました通り、「CHOISIR」が今号をもって終わりとさせていただきますにあたり、残った購読料をどうするか、お知らせさせていただきますよう、お願いいたします。

今号をお送りいたしました封筒の宛名書きの下に数字を示しましたのは、何号分まで購読料をお預かりしているかの数字です。

購読料が残っていらっしゃる方に関しましては、残金をお返すのか、「ヘテロティカ」の購読料として当てさせていただいてよいのか、項目を設けた葉書を同封しておりますので、近日中に返送して下さるよう、お願いいたします。既に私信でお知らせ下さった方も、お手数ですが、作業の都合上、今回同封いたしました葉書にてお返事くださいますよう、お願いいたします。

購読料が今号でちょうど切れた方には、返信用の葉書は同封しておりません。

既に購読料が切れていらっしゃる方には、最後ということで今号をお送りしております。もしお気持があれば、同額の切手をお送りいただければ幸いです。年に6号発行で3000円ですから、1号あたり500円ということになります（本来ならば1部300円+送料190円=490円ですが、年間購読料はキリのいいところで設定させていただいております。ご了承ください）。宛名書きの下の数字がたとえば「~46」となっている場合は、前号で購読料が切れているということですから、1号分の500円に相当する切手をお送りいただくか、お振込いただけると幸いです、ということです。

なお、今号でちょうど購読料が切れた方も、よろしければぜひ「ヘテロティカ」をご購読ください。季刊発行で年間購読代3000円です。

振込先  
連絡先

名義：ヘテロティカ

ヘテロティカ

どなた様も、どうもありがとうございました。またお目にかかれれば、嬉しく思います。

色川奈緒



## 『やおい論争V』のご案内



92年5月（20号）から4年続いてきた「やおい論争」も、今号をもって終結させていただきました。「やおい論争」だけ読みたいというお手紙をたくさんいただいたのと、コミケ出展用ということで、合本をまとめてきましたが、こちらはいよいよ最終刊です。

合本V号はプ厚くなってしまい、お値段も少々上げさせていただきましたが、ぜひご利用ください。

1部1000円 送料190円

郵便振替

名義：ショワジュール

**CHOISIR Vol.47 (最終号)**

発行年月 96. September

編集発行

年間購読代 3000円 (送料含・年6回発行)

1部=300円

郵便振替

■■■■ (名義: ショワジュール)

■無断転載・複製はお断り■